

巻頭エッセイ

プロジェクトXを観た



津田尚輝

株式会社アイ・エイチ・アイマリンユナイテッド
代表取締役社長

1月7日のNHKテレビでプロジェクトXが放映された。「世界最大の船 火花散る闘い」というタイトルで昭和40年代初頭の大型タンカー建造を取り上げたもので、昨年NHKから取材要請があり、正月の放映となったものであった。

造船に働く身でもあり、当社の建造船に関するテーマでもあったので一生懸命観た。番組は四方を海に囲まれた資源無き国、日本が、メジャーに蹂躪されたままでは日本はだめになる、だめな国にしたいくないとあって、資源の確保に奔走したオイルマンの志と、それを可能にした造船技術者と関連者の話しを纏めたものであった。

船は昭和41年に横浜工場で建造され、その後世界のタンカーの標準となった（最近の言葉で言えばデファクトスタンダード）世界初の超大型タンカー出光丸で、当時10万トン強が最大のタンカーであったものを一挙に20万トンの壁をクリアしたものでした。

400kmにわたる高張力鋼の溶接の質と量をこなす難しさ、大きさゆえに太陽熱による変形でシャフトの軸心を出す難しさなどが映し出されていた。

今までは、この番組は一種の英雄譚と思い、なんと無く、さらっと観て、世の中には偉い人がいるものだ、自分は何をやっているのだ、何をやってきたのだと、深く深く反省し、反省している内に、睡魔に勝てず、寝てしまい、次の朝はけろりと忘れてしまっていた。

この繰返しで反省する事しきり、また俺はどうせ凡人なのだからしょうがないと言って、徒に馬鹿を重ねて今に至っている。この番組を見て、建造した船こそ違え、3週間で1隻ずつ船を建造する事に血道をあげていた時代を思い出した。当時は目標に向かって邁進するなかで、仕事に関係する人や、現場の人の知恵をどんどん生かして、また皆が何とか知恵を出そうとした時代でもあり、それが会社の発展や自己実現に結びついていると、確信していた時代でもあった。この番組は一人の英雄の言葉を借りて、時代を映してはいるが、単なる英雄譚ではなく、同時代の、名も無い人々が、一緒に努力をした結果の成功談であると気がついた。名も無い多数の人の真摯な努力が社会を支えてきたし、これからも支えて行く事になる。

そういう目で見るといろいろな事例が見えてく

る。日本の一時代を画した、海洋土木技術の発展と、それを可能にした各種の作業船など、その裏で名も無い人々の大変な努力があったと想像するに難くない。是非良いテーマを見つけて、プロジェクトXで放映されるようにしたい。今では、世の中当たり前で使っているインターネットにしても、日本では導入にあたって、必死の努力で環境整備を行い実現したものであった。将来絶対にインターネットの時代が来るし、必要となるという、強い思いを実現しようとした人がいて、それをバックアップする無名の人たちがいたので現在がある。それは技術的な闘いもさる事ながら、日本にはなじまない、必要無いという、周囲の無知や無理解の克服であり、最大の敵の前例主義と権威主義との闘いであったという。官僚機構の中にいながら、ひそかに研究者に協力する人もいたという。最近爽やかな空気を与えてくれた、ノーベル科学賞受賞の田中さんも、田中さんを支えてくれた人々と一緒に受賞したいと発言して、感銘を与えた。これらの人々に共通しているのは技術の前には、学歴も、権威も、無い、平等である事を教えてくれているような気がする。

これが日本の良さの原点であり、ものづくりでしか国を維持する事が出来ない民族が、よすがとする所ではないかと思う。バブルの後遺症が言われて10数年未だにトンネルの先が見えない状態が続いているが、この時に出来た価値感、「どんなかたちでもお金を沢山稼ぐ人が偉い人」という考えかたちから抜け切れていないのが低迷の一因かもしれない。「地道な努力を周囲の知恵と協力を得ながら続ける事が価値有る事」という一時代前の価値感が薄れた事が、もの作りの原点を忘れさせ、低迷にあえぐ結果となったのではと考える。

そういう時代を生きてきた、自分の責任として次の世代に、上のような価値感を教えようと思うが、自分の子供達でもなかなか出来切れていない。子供で十分出来なければ何時できるか分からない孫を対象にするか、それとも、会社を辞めたあと、学校の先生になって、ものを作る楽しさを教育するかとも思うが、教師の資格も無いし、先生も大変そうだし、結局凡人は凡人で、これもだめ、あれは難しい、今はどうなっているのだと、何もせず嘆くだけになりそう、あーあ！無念！